

東秩父村 

清水希容子

一般財団法人 日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

東秩父村は人口3,200人、埼玉県西部に位置する県内でたった一つの村。清流・^{つきかわ}楓川の最上流で、外秩父の山々に囲まれる。

東秩父の名は、昭和31年に、大河原村と^{つきかわ}楓川村が合併し、秩父山脈の東に位置していることから名付けられた。村の西の境である^{さだみね}定峯峠を越えると、秩父市や皆野町のある秩父盆地となり、その向こうが秩父山脈である。

東秩父村へは、東京都心から東武東上線の急行に乗り70分で小川町駅につき、そこからバスで15分。風情のある古い商店が並ぶ街道をゆき、徐々に山腹へ向かっていく。村に入ると、穏やかな流れの小川、点在する畑と集落、低く連なる山々……のどかな風景が広がる。

歴史をさかのぼると、この周辺は“^{まき}牧”と呼ばれる古代の牧場が多くあった馬の産地だった。鎌倉時代、馬を操るのが得意だった地元の武士が、一大時に「いざ鎌倉！」と勇ましく馳せ参じた。その時の道は、鎌倉街道・^{かみつみち}上道と呼ばれ、所沢、国分寺を通過して鎌倉へとつながっていた。鎌倉街道は、関東平野の各地より鎌倉に至る道の総称で、他に今の宇都宮（下野）を経て奥州へ向かう^{なかつみち}中道、東京湾沿いに下総、常陸へと向かう^{しもつみち}下道などがあり、中でも上道は、信濃、京都につながる最も主要な道であった（右図参照）。

江戸時代になると、村に農業の副業として紀州から和紙の技術が伝わり、きれいな水と乾いた風の吹く独自の気候を活かして、細川和紙の産地となる。

隣町・小川町とともに日本三大和紙産地と呼ばれ、その繁栄も、大消費地・江戸とを結ぶ“街道”の存在が大きかった。

和紙は、洋紙にとってかわられ、今は村に小さな工房が数件残るだけになった。紀州では、すでに和紙の技は途絶えている。和紙の技を伝えるため、1989年、村は中学校跡地に「東秩父村 和紙の里」を設立した。支配人の福島榮二氏は「細川和紙は、人の技が根付くこの地でしかつくれません。日本で和紙がなくなったら一大時、村あげて残していきたい」と語る。

地元の子供たちは全員、小学校の授業で、自分の卒業証書の紙を^す漉く。伝統の技への関心の高まり、充実した施設との口コミ評判により、関東全域から小中学校の団体の来館が増え、多い時で一日600人が貸切バスに乗って体験にやってくる。

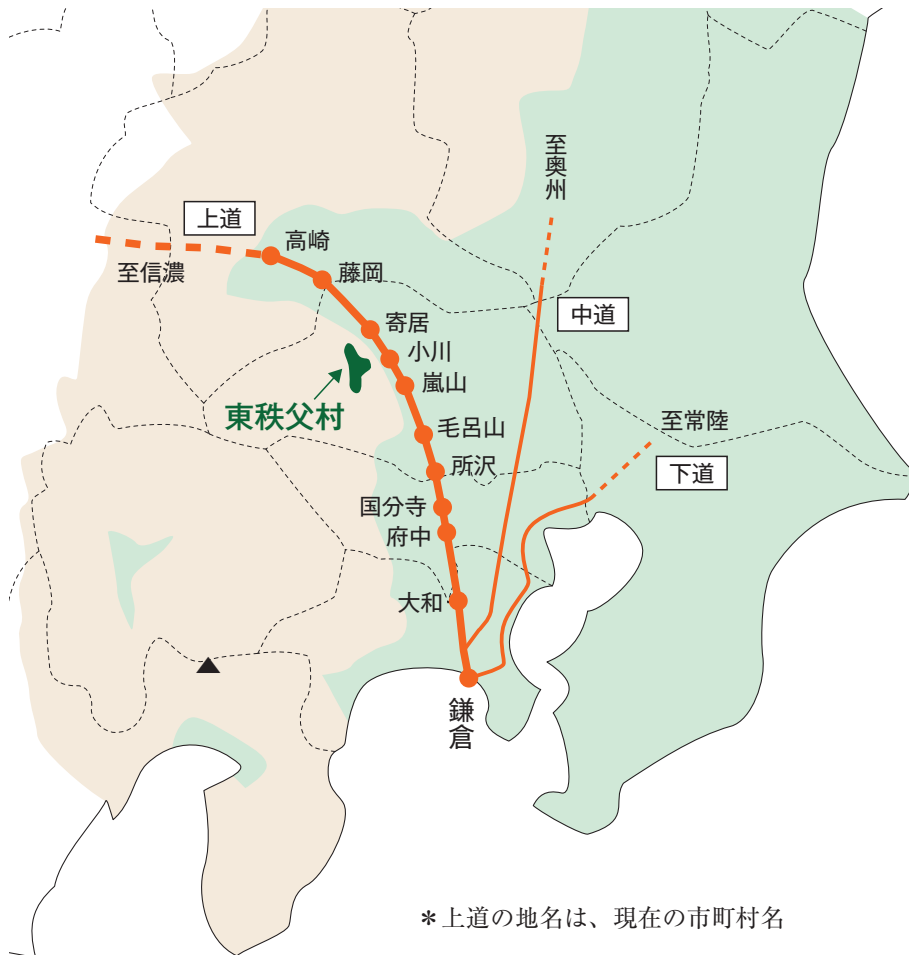
東秩父村・小川町周辺は、関東平野の入口となる重要な地域。鎌倉街道の他にも、川越街道（国道254号線）、秩父往還（県道11号線）、八王子往還（県道30号線）などが通り、現在も関越自動車道（嵐山小川IC）の高速道路が近くを通る。

松山城（東松山）、鉢方城（寄居）、忍城（行田）の城址も集中している。忍城は、小田原城が開城した後も豊臣側が攻めあぐねた武州の城として、映画「のぼうの城」（2012年）で描かれた。

街道沿いの村は、今も昔も変わらぬ重要な役割を果たしている。

町のあり様について、由布院温泉の中谷健太郎氏は語りました。
 小さいから、身近に暖かい関係が生まれる。
 小さいから、個性的な価値を生み出せる。
 小さいから、大きな資本を必要としない。

中世の道・鎌倉街道



鎌倉街道 上道



(写真提供) 毛呂山町歴史民俗資料館